

# 進化する書体 実用美競う

携帯電話で使われている文字が新聞や書籍とは違うのをご存じだろうか。新聞などは横画が細く、最後に飾りがある明朝体が一般的。一方、携帯電話は太く飾りがないゴシック体が用いられる。ただ、それだけではない。

## ■重心・白地の大きさ調整

面積に限りがある液晶画面は、線が込み入れば真っ黒になり、ゆがみさえ出てしまう。印刷に比べ不利な条件を克服するため、文字の作り手は数々の工夫を盛り込んできた。先駆者といえるのがシャープ。液晶でも読みやすい「LCフォント」を作り上げた。

基本となる文字デザインは4つの特色を持つ。まず重心。縦書きで美しい文字も、液晶で多い横書きにすると、実は重心が上下にばらつく。形を微妙に調整、重心がそろうように改めた。次に部首のバランス。偏と旁(つくり)

## シャープのLCフォント

LCフォント

仕事革新

通常

仕事革新

LCフォント

駅 駅



ともに重心がそろうよう配慮した。

「ふところ」と呼ばれる字が書かれていない空間を広く、均一にした点も特徴。例えば「駅」。旁の線に囲まれた白地は印刷文字より大きい。目に明るく映り、字が大きく見える。線幅も工夫、黒みをできる限り均一にした。

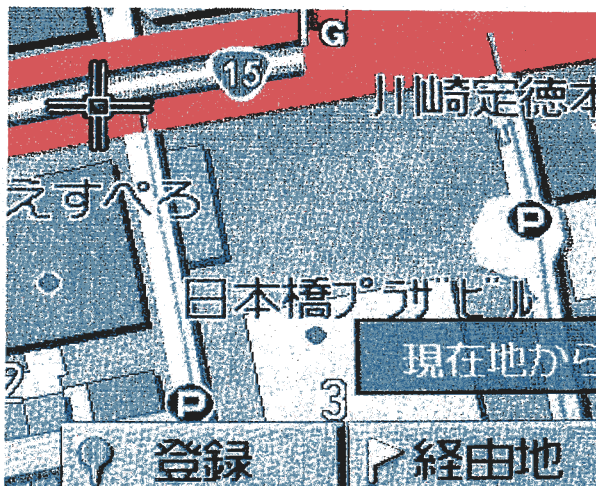
もう一つ重要なのが「省略」の技術だ。文字が小さくなれば、つぶれて判別できないこともありうる。そこで、文章を読めば意味が分かる程度に線を省略する。基本は「一番外側の線は必ず残し、内側からとっていく」(小谷章夫・コンテンツ技術開発室技師長補)。

より線をなめらかにする技術や、文字を縦長や横長に変える手法も開発。

通常

# 液晶画面用フォント続々誕生

人類は粘土、石、パピルスといった多様な素材に文字を描いてきた。記述される側で長く主役を飾っているのは、紙。だが、現在は液晶画面がその座に迫る。そして、文字も、新たな媒体にふさわしいデザインが続々と生まれている。



他社製の携帯電話など多様な場面で使われている。永松孝之・コンテンツ技術開発室主事は「ケータイ小説のヒットなど、携帯で文字を読む習慣が広がっている。現在のゴシックだけでなく、明朝体も作り上げたい」と話す。

## ■濁点・半濁点一目で判断

シャープと携帯書体のシェアを2分するリムコーポレーション(浜松市)は、液晶画面での読みやすさを追求する。千葉大と共同で開発した「Uni-Type」は「日本語の文字をリセットする」(間淵雅宏副社長)意欲作。携帯電話やカーナビゲーションなど、活躍の場が広がっている。

適正な線の太さなど、7つのコンセプトを踏襲して作られた文字。とりわけ目立つのが、ひらがなやカタカナなど、日常使用する文字の70%を占めるという「非漢字」の独創性だ。そのカギは、濁点、半濁点にある。

従来濁点の2つの点は長さがそろわない。Uni-Typeは、大げさなメリハリを付け、小さな文字でも半濁点と間違わないよう配慮。半濁点の丸もしっかり表示する。「バリ」と「パリ」などが一目で判断できる。数字も「3」「9」などの線のバランスを変え、分かりやすさを目指している。

印字では美しさを醸し出す微妙な曲線にもメスを入れた。「直線はあくまで直線、しかもできる限り水平か垂直に仕上げた」(間淵副社長)。線同士の間隔も大きくした。既に、非漢字を改めたフォントを採用した携帯電話や

リムコーポのUni-Type

Uni-Type

がぎぐげご

通常

がぎぐげご

Uni-Type

花

通常

花

光学の世界に新天地

カーナビゲーションが店頭にお目見え。漢字を含めたタイプも登場する。

文字の原型が生まれた紀元前3700年ごろから、人類は文字を工夫し、美しさを競った。時を経て、光学という新たな世界に踏み出した文字。そのデザインも、日進月歩で進化するはずだ。

(初田聡)